

『古事記』上巻の「鵝」字考

占 才 成

1 はじめに

『古事記』上巻の大国主神の物語に「故、大国主神、坐出雲之御前時、自波穗、乘天之羅摩船而、内剥鵝皮剥、為衣服、有帰来神。」¹とある。大国主神が出雲の御大の御前にいる時、波の上を天の羅摩船に乗って、鵝の皮を内剥ぎに剥いで、それを服にして近づいてくる神がいるという場面である。この「鵝の皮」の「鵝」は真福寺本・道祥本・春瑜本・兼永筆本・前田家本などの諸写本では、「鵝」であるが、延佳本に「鵞、倭名無所見。蘿摩船・鵞皮衣服大小不類。舊事紀亦作鵞、按倭名鈔、蛾、和名比比流。説文蠼、作飛虫也。蛾字之誤乎、暫記之、傳疑。」²とあり、「鵝」は「蛾」の誤りであると指摘されている。本居宣長の『古事記伝』にも「鵝字は決して誤なり、【此は甚く小きことを云るに、鵝は、さいふばかりの小鳥にはあらねばなり、】」³と小さな天の羅摩船に乗る神として鵝では大きすぎるので、それは蛾の誤りであろうとされており、延佳本の誤字説を支持する上で、その「鵝」をヒムシと訓んでいる。羅摩はガガイモ科つる性多年草の蘿摩の古名であると言われ、その実は細長くて袋果があり、割ると船の形になる。それゆえに、天の羅摩船が小さな船であるという。天の羅摩船に乗っている神の名は少名毘古那神である。

『日本書紀』神代上に「是時、海上忽有人聲。乃驚而求之、都無所見。頃時、有一箇小男、以白蕨皮爲舟、以鷗鷯羽爲衣、隨潮水以浮到。大己貴神、即取置掌中、而翫之、則跳嚙其頰。」⁴とある。人間の声が海の上から聞こえるが、その姿が見えない。見ても見つからなくて、しばらくして一人の小さい男が現れた。その小さい男は小彦名命（即ち『古事記』の少名毘古那神）である。『日本書紀』を参照して見ると、確かに『古事記』の少名毘古那神は小さいので、鵝の皮を丸剥ぎに剥いで作った服は着られないはずである。現行の古事記注釈書や研究書の一部には、その誤字説を参照し、字を「蛾」と改め

¹ 西宮一民編、『古事記 修訂版』、おうふう、2000年、P62。

² 度会延佳校訂、『鼈頭古事記』、勢陽講古堂・洛陽重徳堂蔵版、1687年。早稲田大学図書館蔵土岐文庫の画像によった。

³ 本居宣長、『本居宣長全集 第十巻』、筑摩書房、1968年、P3。

⁴ 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋、日本古典文学大系『日本書紀 上』、岩波書店、1967年、P131。

ているものと、字は改めないが、実質的に「蛾」を取るものがある。それらの「蛾」の誤字説を支持する理由として、①その天の羅摩船に乗る神が小さいのに対して鵺が大きすぎることで、②日本書紀の持統天皇紀に「越前国献白蛾」とあること、③仁徳天皇の条に蛾を「飛鳥」と言っているのが、蛾を鳥と見立てていること、④『万葉集』三三三六に「蛾葉の衣」を上げているが、それらの理由はいずれも間接的なものであり、筆者は説得力に欠けていると考える。

本稿では諸写本の検討から改めて「鵺」字について考えたい。『古事記』の写本は大部分「鵺」と記されており、一つも「蛾」と記されているものがない。次に、道祥本・春瑜本の「鵺」字の左の行間に「鵺鵺羽、日本紀」とある通り、『日本書紀』一書では「鵺鵺」となっており、これは無視できないと考える。天の羅摩船は本当の羅摩の実で作られた船であるか、「内剥鵺皮剥、為衣服」というのは果たして剥いだ皮を全部使って作られたものなのかは、まだ問題が残っている。「蛾」字の誤字説は仮説の一つに過ぎず、その誤字説を支持するよりも、むしろ「鵺」字の解釈に立ち返ったほうがいいと考える。こうした点を踏まえて本稿では誤字説を採用せず、「鵺」字のままで小さな鳥の意を持つということを主張したい。

2 「蛾」の誤字説及びその影響

2.1 先行研究の誤字説

延佳本に『古事記』上巻の「鵺」が「蛾」の誤りであると主張されて以来、特に本居宣長氏がその誤字説を支持したために、『古事記』の注釈書や現代語訳はその誤字説に賛成するものが多くなってきた。

次田潤（1926）の『古事記新講』に「延佳は『蛾』の誤であると云ひ、宣長もその説に従つて、蛾をヒムシ（火取蟲）と訓んでゐる。鵺は大きい鳥であるから、羅摩船に乗る者の衣服として似合はしくない。書紀（一書）には『以鵺鵺羽為衣』とある。ササギは即ちミソサザイで小鳥であるから、是ならば羅摩船にはふさはしい。古史傳には『鵺』は『鵺』の誤か、若しくは『鵺』をササギと思ひ誤つて当てたものであらうと云つてゐる。」⁵と解釈し、本文に「鵺」という字を用いながら、「ヒムシ」と訓んでいる。

中島悦次（1930）の『古事記評釈』に「度会延佳氏は『蛾』の誤と云ひ、宣長翁はこれに従つて、蛾をヒムシ（火取虫）と訓んだ。成程『鵺』では羅摩船には大き過ぎる。書紀の一書には『以鵺鵺羽為衣』とある。サザキはミソサザイ（サザイはサザキの音便）で小鳥だから、これなら羅摩船に相応してゐるのか。植木直一郎先生は『鵺』（オホカリ）

⁵ 次田潤、『古事記新講』。明治書院。1926年。P174。

でよいとされる。」⁶と解し、本文にも「鵺」という字を表記するが、「サザキ」と訓んでいる。

誤字説を支持するのは解釈と訓に止まらず、池田常太郎の『今文古事記』（1911、日就社）、松雲堂編輯所編の『新譯古事記』（1920、松雲堂）、桜園書院編輯部編の『譯文古事記』（1926、桜園書院）、幸田成友校訂の『古事記』（1928、岩波書店）などの本文には「鵺」ではなく、「蛾」に改めている。また、渋川玄耳の『三体古事記』（1940、誠文堂）の本文には「火取蛾」と表記し、植松安・大塚龍夫の『古事記全釋』（1928、広文堂）の本文には「鵺」と記されているが、訳文には「蛾」に改めている。

以上に挙げた古事記注釈書と訳本はすべて戦前のものであるが、戦後のものはどのようなかさらに見てみよう。

1958年に倉野憲司氏と武田祐吉氏の校注した日本古典文学大系『古事記 祝詞』には古事記伝の誤字説を紹介した上に、「持統天皇六年九月の条に『越前国献白蛾。』とある蛾は一本に鵺とあり、これは鵺の誤りらしいから宣長説も捨て難い。また下の仁徳天皇の条に蚕が蛾になることを述べて、『一度為飛鳥』とあるから、鵺は蛾が飛ぶ鳥だということから用いた字か。とにかく本来の鵺では大き過ぎるし、皮というのにも当らない。書紀の一書には『以鷦鷯羽為衣』とある。鷦鷯はミソサザイ。」と誤字説を支持しているだけでなく、その根拠を検討した。「蚕が蛾になる」や「飛ぶ鳥」という考え方が後の注釈書に大きな影響を与えた。

1966年の尾崎暢映氏の『古事記全講』にはまた、まず延佳本と記伝の誤字説を紹介した上で、「理にかなった見かたのようではあるが、書紀の一書には、少彦名の神は鷦鷯の羽をもって衣として白薺の舟に乗り、潮のまにまに浮び到ったという伝承も見えるから、誤記であるとも決められない。」⁷と指摘されているが、訳文の部分はやはり「蛾」に改めている。

1973年に荻原浅男と鴻巣隼雄の校注・訳日本古典文学全集『古事記』には、『鵺』は『蛾』の誤りという説があるが、仁徳天皇の条に蛾を『飛鳥（とぶとり）』といているので、蛾を鳥と見立てて『鵺』と書いたのであろう。ヒムシの語源は『靈虫』だという説がある。『万葉集』三三三六に『…沖つ藻を 枕になし 蛾羽の衣だに着ずに。』⁸と頭注に解釈し、訳文も「蛾」に改めている。

1982年の日本思想大系『古事記』の本文と訓読文では「鵺」であり、「蛾」を取らなかったが、注には「鵺」字を「蚕の『蛾』を『飛鳥』といているので、蛾を鳥と認めて『鵺』に書いたという。」⁹と解釈し、「鵺」は「蛾」の誤りであることを暗示している。

⁶ 中島悦次、『古事記評釈』。山海堂出版部。1930年。P145。

⁷ 尾崎暢映、『古事記全講』。加藤中道館。1966年。P178。

⁸ 荻原浅男氏、鴻巣隼雄、『古事記』。小学館。1973年。P109。

⁹ 青木和夫、石母田正、小林芳規、佐伯有清、『古事記』。岩波書店。1982年。P76。

2000年の『古事記』修訂版に岩波書店の日本古典文学大系『古事記 祝詞』の注釈を引用し、「岩¹⁰は持統紀六年九月条に『越前国献白蛾』とある『蛾』は一本に『鵝』とあることや、仁徳記に蚕が蛾になることを『一度為飛鳥』と述べていること等から、蛾を飛ぶ鳥として鵝の字を用いたかとする。」¹¹とされており、「鵝」をヒムシと訓み、「蛾」の誤字説を支持する姿勢を示している。同じ西宮氏の新潮日本古典集成『古事記』には、「『鵝』を鵝鳥では大きすぎるというので、『蛾』とする説がある。しかし、下巻、仁徳天皇の段に『蛾』を『蜚鳥（とぶとり）』とするように（二一二頁）、ここも『蛾』を飛ぶ鳥に見立てて『鵝』と書いたものであろう。蛾を『ひむし』というのは『飄る（ひらひら飛び上る）虫』の意という。または「靈虫」とも。」¹²とされており、本居宣長の挙げた理由を認めてはいないが、「蛾」の誤字説を認めていることは明らかである。

近年、古事記の注釈書や現代語訳・研究書には、原文が「鵝」のままにもかかわらず、訳文では「蛾」に改めているものと、注釈では「蛾」あるいは「飛ぶ鳥」と解釈したものが少なくない。そして、大部分の注釈書と研究書は「鵝」をヒムシと訓んでいる。

2006年の三浦佑之氏の『口語訳 古事記』の訳文には「鵝」と「蛾」のいずれがなく、「ヒムシ」の片仮名表記だけが記されている。菅野雅雄氏の『古事記——神話と天皇を読み解く』（2012年・新人物往来社）の現代語訳の部分に「鵝」を「蛾」に改めている他、池澤夏樹氏の日本文学全集『古事記』（2014年・河出書房新社）にも「鵝」を「蛾」に改めている。

近年の注釈書や現代語訳の一部には、原文は「鵝」字のままとし、現代語訳で「蛾」に改め、あるいは注釈に「蛾」の説明を取り込んだり、訓読みに「ヒムシ」と訓んだり、誤字説を暗示するものが少なくない。

2.2 「蛾」の誤字説の理由及び影響

上述のごとく、「蛾」の誤字説は延佳本によって提出されて以来、支持するものが少なくない。この誤字説を明らかに支持しなくても解釈の中に、蛾に関係がある注釈をつけたり、ヒムシと訓んだりするものが多い。倉野憲司と武田祐吉のごとく、その誤字説を捨て難いと強く主張する学者もいる。しかし、誤字説はあくまでも延佳本の一つの仮説に過ぎず、本当に妥当であるかどうかは詳細に検討しなくては簡単に判断を下すことができないと思う。その妥当性を検討する前に、まず「蛾」の誤字説を支持する立場についてその理由をまとめよう。先行研究の意見をまとめると、次の主な理由が挙げられる。

（1）小柄な男神に鵝の皮の服がふさわしくないこと（鵝皮過大論）。これは誤字説を

¹⁰ 即ち、倉野憲司と武田祐吉の大系本の古事記。

¹¹ 前掲書『古事記 修訂版』P62。

¹² 西宮一民。『古事記』。新潮社。1979年。P74。

支持するのに最も根本的な理由である。天の羅摩船は羅摩の実で作った乗り物だと思われるので、その乗り物に乗る少名毘古那神は言うまでもなく、小さな神である。また、上述のごとく、『日本書紀』にも小彦名命の声が聞こえるが、体が小さいので、その姿が見えない。それ故に、「鵺」の皮を丸剥ぎで作った服は体が小さい少名毘古那神にふさわしくない。即ち、「蘿摩船・鵺皮衣服大小不類」ということになる。この理由は延佳本に提出され、本居宣長の手によって強く主張されて以来、影響が極めて大きい。

(2)「越前国献白蛾」の異説のこと。持統紀に「越前国献白蛾」とある蛾は一本に鵺とある。『日本書紀』には「蛾」と「鵺」の異説があるということも有力な論拠の一つである。

(3) 蛾を「飛ぶ鳥」と見立てていること。蛾は飛ぶ虫として、鳥と似ているところがあるからこそ、誤字説に援用された。仁徳天皇の条に蛾が『一度為飛鳥』とあるから、ここの「鵺」について、蛾が飛ぶ鳥だということから用いた字かと指摘され、研究者に影響がある。

(4)『万葉集』三三三六に「蛾葉の衣」があること。最も根拠らしいものは『万葉集』三三三六に『…沖つ藻を 枕になし 蛾羽の衣だに着ずに』である。ここに「蛾葉の衣」という直接的な言葉が出てきて、また同じ上代文献であるから、根拠としては説得力があるようである。それに比べると、鵺の皮あるいは羽で作った服というようなものは上代文学に他に例が見られない。

「蛾」の誤字説を支える主な理由は以上の四つであるが、いずれも合理的に見え、推測に止らず、文献資料の支持もあり、疑問を挿し込みにくいようである。したがって、誤字説誕生後、注に「蛾」の誤字説を詳しく説明するのみならず、本文までも「蛾」に改めている注釈書や現代語訳が少なくない。大部分の注釈書と現代語訳は注に「蛾」の誤字説を示す。また、それは古事記のこの部分の解釈に大きな影響を与えた。先行研究から見ると、研究者自身でも深く誤字説を信じる人が珍しくない。一般の読者は専門的な知識を持っていないので、もし、「蛾」に改めている訳本を読んだら、もともとの用字が「蛾」であったと誤解しやすい。

また、それは日本の『古事記』の研究や注釈に影響を与えたのみならず、海外の研究や訳本にも影響を与えた。1963年に刊行された周作人の『古事記』中国語訳には「鵺」ではなく、「蛾」と翻訳し、注にももとの用字が「鵺」ということを一字も説明していない。それだけでなく、周作人の翻訳した『古事記』には「此言取雀瓢作船、蛾皮為衣、皆極言細小」¹³と注を作り、ここは雀瓢を船とし、蛾の皮を衣とし、誰もが細小を言うであろうと解釈した。無論、1979年にもう一つの中国語訳『古事記』（鄒有恒・呂元明の訳本）は「鵺」と翻訳したが、この中国語訳は一回しか刊行されず再版はしなかった

¹³ 周作人（注訳）、『古事記』、人民文学出版社、1963年、P29.

ので、影響がそれほど大きくない。それに比べると、周作人の中国語訳『古事記』は1990年・2001年・2015年・2018年に何回も再版し、その中の2018年の一年間だけで中国法制出版社・中国致公出版社・中国出版集团現代出版社・北方文芸出版社・吉林出版集团有限公司という五つの出版社で六回も再版した。すべての周作人の再版訳本『古事記』は「蛾」であり、中国で広く読まれている。周作人は魯迅の弟であり、中国の有名な翻訳家であり、彼の『古事記』中国語訳は訳文が正確であるとされ、信用されている。しかし、もし「蛾」の誤字説が不適切であれば、その影響が大きくなるので、その誤字説を検討する必要があると考える。

3 「蛾」の誤字説の誤り

3.1 諸写本の用字

ここの「鵝」字は果たしてどんな字であるか。この問題を検討する前にまず諸本の用字を検討してみよう。『古事記』最古の写本である真福寺本をはじめ、主な写本の用字は次の通りである。

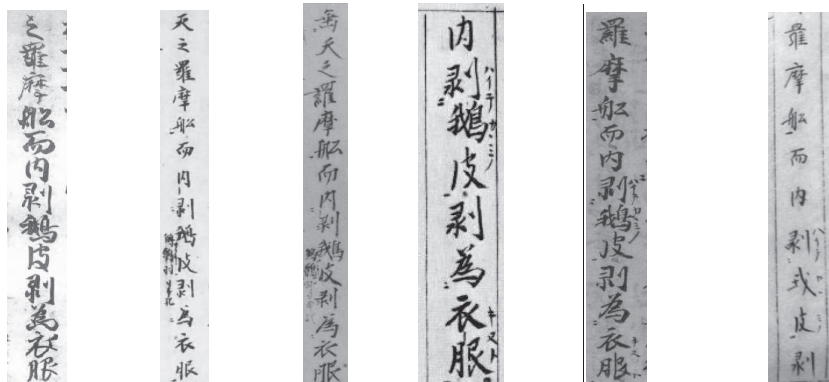


図1.真福寺本 図2.道祥本 図3.春瑜本 図4.兼永筆本 図5.前田家本 図6.猪熊本

上述の主な写本には、猪熊本以外にすべて「鵝」と書いてある。そのほかに、梵舜本・荷田春満本・寛永版本などの諸本にも「鵝」と記す。「蛾」と書く写本は一つもないのである。延佳本の本文にも「鵝」と書いてあるが、ただ頭注に「蛾」の誤字説を支持する旨が記されている。また、延佳本の頭注に「蛾字之誤乎、暫記之傳疑」と「蛾」字の誤りであることを疑いながらも、暫くこのように記し、疑いを伝えたと書いてある。しか

し、前述のごとく、その誤字説は現在、本居宣長の手によって広く知られており、日本に限らず海外にも大きな影響を与えた。そこでこの点を検討すべきである。

誤字説を証明する前にまず見なければならないのは諸本の誤写の問題である。なぜ大部分の写本（猪熊本以外）は「蛾」を「鵝」に書き間違っただのであろうか。筆者はむしろ本来「鵝」の字であり、もともと「鵝」であるからこそ、その後の写本は期せずして例外なく「鵝」と書いたのではなかろうかと考えている。

3.2 鵝皮過大論の再検討

延佳本の「蘿摩船・鵝皮衣服大小不類」から出発した鵝皮過大論は誤字説を支持する最大の理由だと言っても過言ではなかろう。上述のごとく、もし天の羅摩船が本当の植物の羅摩の実で作った乗り物だとすれば、確かにその乗り物に乗る神の体が小さいということはすでにそれ以上説明する必要がある。大己貴神の掌に乗せられる神だから、その体の小ささは明確である。『古事記』の天の羅摩船に乗っている少名毘古那神は即ち『日本書紀』の小彦名命であり、体が小さいということは疑問がなさそうである。体がそのように小さい神は「鵝」の皮を丸剥ぎで作った服には確かにふさわしくない。

しかし、ここに問題点が少なくとも二つある。

一つの問題点は天の羅摩船が本当の羅摩の実で作ったものであるか。また、その大きさは現実の植物としての羅摩の実と同じであるか。神野志隆光と山口佳紀の『古事記注解4』に「しかし、『天之羅摩船』とあって、『天之』が冠せられていることから言えば、それが現実のガガイモと同じ大きさであることは、必ずしも保証されていない。」¹⁴と指摘されている。周知のように、『古事記』には「天の浮橋」、「天の沼矛」、「天の石屋戸」などのように、「天の羅摩船」と類似している言い方が多い。しかし、「天の浮橋」は現実の「浮橋」であるかについて、尾崎暢央が「宣長は天地の間の橋の義とし、平田篤胤・田安宗武は船の義とし、新井白石は海に連なる戦艦の義とし、アストンや神田秀夫氏は虹の橋の義とし、金子武雄氏は虹または虹を媒介として考えられた想像上の橋であるとしたが、書紀の天孫降臨の条に『自日二上天浮橋立於渚在平処』とあるのによれば、海上の浮島に通ずる或る場所を示すもののようである」¹⁵という指摘があり、現実の中の橋ではないと考えられている。「天の沼矛」も同様である。もし、「天の沼矛」を現実の中の矛と理解すれば、そんなに小さい矛で海をかき回して国を造れるはずもないであろう。天の羅摩船を現実の羅摩の実で作った乗り物だとこだわり過ぎる必要はないのではないか。

¹⁴ 神野志隆光・山口佳紀。『古事記注解4』。笠間書院。1997年。P183。

¹⁵ 前掲書尾崎暢央の『古事記全講』P34。

もう一つの問題点は「内剥鵝皮剥、為衣服」を「鵝の皮を丸剥ぎに剥いで衣服を作る」と解釈することである。その中の「内剥」の「内」の解釈は非常に重要である。従来の解釈では大部分「丸剥ぎに」・「そっくり剥ぐ」としている。それ以外の解釈は筆者の見ている限りでは見当たらない。たとえば、日本古典文学大系『古事記』には「内剥」を「うつはぎに」と訓み、「全剥で、丸剥ぎに剥いで」¹⁶と注にした。尾崎暢央も「うつはぎに」と訓み、「丸剥ぎに剥いで。『うつ』は天の岩戸の段に見えた内^{うつめ}抜きのウツで、そっくりの意。」と注釈し、「蛾の皮をそっくり剥いで」¹⁷と訳した。この「内」という漢字を従来は「ウツ」のように訓んでいるが、「まるまる」・「そっくり」・「まったく」と解釈するのが果たしてよいのだろうか。それも再検討する必要がある。『古事記』には「内」の字を含んでいる用例が51例ある。その中の31例は人や神の名前（22例）と地名（9例）であり、8例は「殿内」・「宮内」・「国内」・「室内」であり、6例は「之内」・「以内」・「其内」などのように範囲を表すものであり、4例は位置を表す「中」という意として、つまり「外」との反対語として用いるものである。そのほかの2例は一つが該当の「内剥鵝皮剥、為衣服」であり、もう一つは尾崎暢央の言う天の岩戸の「内抜天香山之真男鹿之肩拔而」¹⁸である。

つまり、『古事記』の「内」という字は六割以上が人と神と場所の名前であり、その他の大部分はある一定の区域・範囲を表す。「内抜天香山之真男鹿之肩拔而」の中の「内」もウツと訓まれ、「まるまる」・「そっくり」・「まったく」と解釈されている。従来の解釈によると、ただ「内剥鵝皮剥、為衣服」と「内抜天香山之真男鹿之肩拔而」の2例は「まるまる」・「そっくり」・「まったく」の意を表す。つまり、「内剥鵝皮剥」は「鵝の皮を丸剥ぎに剥ぐ」、「内抜天香山之真男鹿之肩拔」は「天の香山の真男鹿の肩を丸抜きに抜く」と訳される。この2例の文の構成はまったく同じく、「内+A 動詞+名詞+A' 動詞」であり、A' 動詞はA 動詞と同じ動詞である。変体漢文としての『古事記』の文体から見ると、これは日本語的な漢文である。日本語は述語が名詞の後に置くので、後ろのA' 動詞は述語で、その前にある「内+A 動詞」は連用修飾語として次のA' 動詞の発生状態を修飾する語と言える。つまり、「どうやって剥ぐ」・「どうやって抜く」という「剥ぐ」と「抜く」のやり方を説明している。従来の解釈では「どうやって」は「そっくり」・「まるまる」・「まったく」ということになる。しかし、もし漢籍で分析すれば、もう一つの解釈ができるかもしれない。

『儀礼』喪服第十一に「妾為女君、君之長子。惡筭有首、布總。凡衰、外削幅；裳、内削幅。幅三衄。」¹⁹とあり、妾は女君、君の長男のために服喪する時、髪^髪の毛に粗末な

¹⁶ 前掲書倉野憲司の日本古典文学大系『古事記』P107.

¹⁷ 前掲書尾崎暢央の『古事記全講』P177.

¹⁸ 前掲書西宮一民編『古事記 修訂版』P45.

¹⁹ 阮元（校刻）、『十三經注疏 儀礼注疏』、中華書局、1980年、P1125.

竿で飾り、布で髪の毛を包み、凡そ喪服の上着の小縁を外側に縫い、裳の小縁を内側に縫う。「裳、内削幅」は喪服の裳の布のへりを内側に縫う意である。これは「内＋動詞＋名詞」という文の構造であり、中国語は述語が後ろではなくて目的語として名詞の前に置くので、最後の動詞は要らない。ここの「内」も連用修飾語で、「内側に」縫うという形で動詞「縫う」を修飾する。つまり、この例は「内剥鵝皮剥」とは同じ文の構造である。そのような用法は漢籍には少なくない。同じ『儀礼』の聘礼第八に「庭実、皮則摺之、毛在内、内摺之、入設也」²⁰とあり、宮廷の中に置く進物は獣の皮ならば、左手で二つの前足を持ち、右手で二つの後ろ足を持ち、それを内側に二つに折り畳み、宮廷の南のほうに立つ。この「内摺之」は獣の皮を内側に折り畳むという意味であり、「内＋動詞＋代名詞」のような構造である。また、『儀礼』の聘礼第八に「公升側受几于序端、宰夫内拂几三、奉両端以進」²¹とあり、国君が堂に登り、東の前端に自ら几を受け取り、宰夫が几を内側に向かって三回拂い、几の両端を持って国君に差し上げる。ここの「宰夫」は中国の周の時代の官職であり、「几」は供物を献ずるための台機の「漆几」というものである。この中の「宰夫内拂几三」は宰夫が漆几を内側に向かって三回拂うという意味である。なぜ内側に払うかというと、国君は向こうつまり外側にいるので、外側に払ったら国君にほこりなどをかけたら大変なわけである。「内拂几」は「内＋動詞＋名詞」の構造で、「内」も連用修飾語の働きをしている。

以上の漢籍の例からみると、「内＋動詞＋名詞」という構造の文に「内」は連用修飾語の働きをすれば、その「内」は内側の意味を表すことが明らかである。したがって、同じ構造を持っている「内剥鵝皮剥」という文は鵝の皮を内側に剥ぐと解釈することもできるのではないかと考える。「内」という言葉は中国語では「まるまる」・「そっくり」・「まったく」というような意味がない。そういう解釈は言うまでもなく、日本語らしい把握である。変体漢文で書かれた『古事記』はもちろん、日本語の性格を持っているが、全体が漢字で書かれた『古事記』が基礎としているものはやはり漢文であるから、ここの「内」は日本語の「うつ」という言葉より、漢文の「内側」としてとらえたほうがよいのではないかと考える。

この「内」に関する考察は今後の課題としたい。要するに、もし「内剥鵝皮剥」は鵝の皮をそっくり剥ぐことではなく、内側に剥ぐという意味であれば、鵝の皮は体の小さい神の服に対して大きい小さいかは問題にならない。従来の研究が、どうして鵝の皮が大きいという問題にこだわるのかというと、それはそっくり剥いだ鵝の皮を全部服にしたととらえるわけである。しかし、その鵝の皮を果たしてそっくり全部剥いだのだろ

²⁰ 同上 P1056.

²¹ 同上 P1057.

うか。また、たとえそっくり剥いだとしても、そのそっくり剥いだ皮を全部用い、服を作ったのかどうか。それらはすべて今後検討すべき課題だと言えるであろう。

『日本書紀』に「以白麤皮爲舟、以鷓鴣羽爲衣」と明確に書いてあるように、一匹の「鷓鴣の羽」をそっくり全部使って服にするということは一切書かれていない。それを参照すれば、『古事記』の「内剥鵝皮剥」も鵝の皮を全部使ったと捉える必要がなかろう。それ故に、鵝皮過大論は一見にうなずけるように見えるが、問題点がないわけではない。

3.3 『日本書紀』と『万葉集』の間接証拠について

持統紀の「越前国献白蛾」と『万葉集』三三三六の『…沖つ藻を 枕になし 蛾葉の衣だに着ずに』は「蛾」の誤字説を支持する大切な証拠となる。『日本書紀』の持統天皇紀の「越前国献白蛾」に蛾が一本に鵝とあり、『万葉集』三三三六に「蛾羽の衣」とある。それらは少なくとも、二つのことが示唆されている。一つは、上代文献に「蛾」と「鵝」を混用する用例が見られる。もう一つは上代文献に蛾の羽を服と喩える用例も見られる。「鵝」と「蛾」を混用している用例があるから、『古事記』上巻の「蛾」を「鵝」に書き間違えた可能性がある。上代文献に蛾の羽を服と喩える用例があるなら、『古事記』にも、そういう喩えを用いる可能性もある。ならば本当にそうであるか検討すべきである。

まず、「越前国献白蛾」について検討してみよう。この「越前国献白蛾」に関する研究には興味深い点がある。『書紀集解』に「按蛾微少之物、非可献者。蓋、蛾鵝誤耳。」²²とあり、按ずるに、蛾は微少の物、献ず可き者に非ず、蓋し、蛾を鵝と誤れると述べている。つまり、蛾のようなつまらないものは献ずるものとしてふさわしくない。それ故に、『日本書紀』持統天皇紀の「越前国献白蛾」の「蛾」は「鵝」の誤りであると思われるというのである。集解の著者がここで主張したのは、蛾が微小の物であるから、献上するものにはふさわしくなく、鵝のほうは大きいからふさわしいということである。それはちょうど『古事記』上巻の「蛾」の誤字説とは逆になった。もし、『古事記』と『日本書紀』の誤字説が全部合っているなら、上代の日本の知識人は一体何を考えていたのだろうか。体の大きい鵝を体の小さい蛾に書き間違えたり、体の小さい蛾を体の大きい鵝に書き間違えたりした。鵝と蛾は文字の表記上で確かに似ているが、実物は雲泥の差で間違える可能性はないのである。

では、果たして上代知識人の認識は何であろう。それはもしかしたら、現代人のわれわれの認識に基づいて推測したものではなかろうか。西郷信綱は『古事記の世界』で「私たちは、いわゆる原始人またはもっとひろくいつて昔の人間の非合理性を強調する反面、

²² 河村秀根・益根（編著）・小島憲之（補注）、『書紀集解』、臨川書店、1969年、P1889。

現代人の合理性を買いかぶりがちだが、これは一種の驕慢ではなかろうか。」²³と指摘した。どちらが貴重なものであるか、どちらがつまらないものであるか。これは『日本書紀』の誕生した時代の人によって、判断されたものではないだろうか。周知のごとく、中国で貝が貨幣の役目を果たした時代があるからこそ、中国語にはお金や財宝に関係がある漢字には「貝」を含んでいるものが多く、「財」・「貨」・「寶」・「貢」・「資」・「貴」・「賜」・「費」・「貸」・「質」など、枚挙にいとまがない。しかしながら、二十一世紀の現在には、貝はどんなものになったのであろうか。もし、現代人にとって、蛾が目立たず、見たら嫌悪感を抱く昆虫であれば、貝も目立たず、海辺でも、人に蹴られるまで気づかないものであろう。蛾は現代人の目で見れば、確かに極めてつまらないものであるが、鵺は現代人にとってそれほど貴重なもので、献じるのに値するものであるだろうか。現代人のわれわれの目で『古事記』の時代の合理と不合理を判断することは問題があるのではないか。

聖徳太子が作ったとされる『十七条憲法』の第十六条に「使民以時、古之良典。故冬月有間、以可使民。從春至秋、農桑之節。不可使民。其不農何食。不桑何服。」とあり、民を使役するのに時を以てするというのは古くからの良い教訓であり、暇がある冬になると、民を使役することができるが、春から秋まで、農耕の季節であるから、民を使役してはいけない。民に農耕をさせなければ、食べ物がなく、民に養蚕をさせなければ、着る物がないと養蚕の重要性を強調している。中国語でいう「衣食住行」、日本語でいう「衣食住」のように、人間の生きていく上で必要な物を最も優先した「衣」は古代人にとってどれほど大切なものであるか、ここから見ればわかるであろう。白蛾が特別な種類で養蚕に役に立てば、献上するのにふさわしいのである。献じるものにふさわしくないとするのは、西郷信綱が指摘したように、現代人の我々の驕慢であるのではないか。

現代人の我々の便宜により、時に古代人の「蛾」を「鵺」の誤りだと思ったり、時に古代人の「鵺」を「蛾」の誤りだと思ったりするのは慎重的な研究方法ではないと考える。『古事記』誕生 975 年後の 1687 年に登場した延佳本の誤字説がある程度でそれなりの価値があるのは誰も否定できない。しかし、決定的な証拠がない上にその誤字説を信奉すぎると古事記の真実を見誤るのかもしれない。神野志隆光と山口佳紀の『古事記注解 4』にも「中央公論社版『日本書紀』の校異によれば、持統紀の有力本文である北野本・兼右本・内閣文庫本・寛永版本はいずれも『蛾』であって、「鵺」とあるのは伴信校本に過ぎない。河村秀根『日本書紀集解』は、『蛾』が『微小』のものであるから、『鵺』の誤りではないかと疑ったが、それ以上の根拠はない。」²⁴と指摘されている。

次に、『万葉集』三三三六の「蛾葉の衣」を検討してみよう。

²³ 西郷信綱、『古事記の世界』。岩波書店。1967 年。P6。

²⁴ 前掲書『古事記注解 4』P180。

万葉集の巻十三の三三三六に²⁵

鳥音之 所聞海爾 高山麻 障所為而 奥藻麻 枕所為 我葉之 衣浴不服尔 不知魚取 海之濱遠尔 浦裳無 所宿有人者 母父尔 真名子尔可有六 若草之 妻香有異六 思布 言傳八跡 家問者 家乎母不告 名問跡 名谷母不告 哭兒如 言谷不語 思輒 悲物者 世間有とある。原文は万葉仮名で書いたものであり、訓読みは次のようである²⁶。

【訓読み】：鳥が音の かしまの海に 高山を 隔てになして 沖つ藻を 枕になし 蛾葉の 衣だに着ずに いさなとり 海の浜辺に うらもなく 臥したる人は 母父に 愛子にかあらむ 若菊の 妻かありけむ 思ほしき 言傳てむやと 家問へば 家をも告らず 名を問へど 名だにも告らず 泣く子なす 言だにとはず 思へども 悲しきものは 世の中にそある 世の中にそある

ここにある「我葉之 衣浴不服尔」の「我」を「蛾」と改めている注釈書が多い。しかし、竹柏園複製西本願寺本万葉集には「我」であり、元暦校本・天治本・類集古集には「蛾」である。もし「蛾」と認定したら、「蛾葉之 衣浴不服尔」の訓読みは「蛾葉の 衣だに着ずに」になり、「蛾の羽の衣も着ずに」と解釈されている。しかし、もともとこの「蛾」が果たして「蛾」であるか、それとも「我」であるかは、未確定である。たとえここの「蛾」が定説になったとしても、これはただの比喩として蛾の羽のような薄い着物と、着物の薄さを清新に比喩するために用いるものであろう。実際に神話化して人の服と同一視できるかどうかは問題である。

要するに、第一に、まだ異説がある『日本書紀』と『万葉集』の「蛾」の用例を証拠として、『古事記』の用字を証明するのは極めて不十分で危険である。「蛾」の誤字説の証拠としての『日本書紀』と『万葉集』の用例はいずれも異説があり、まだ定説になっていないのに、説明もないまま用いるのは妥当ではない。しかし、残念ながら従来誤字説の支持者はそれを証拠として分析するとき、誰も『日本書紀』・『万葉集』の用例の異説を言及しなかった。第二に、確かに『日本書紀』と『万葉集』は同様に上代文献であり、傍証として証明するのは特に問題がないが、もともと編集者も編集動機が大いに違うので、全てを同一視してはいけない。たとえ『日本書紀』に「蛾」を誤って「鵝」に書き間違えたとしても、『古事記』に必ずしもそういう書き間違いもあるとは限らないのである。

3.4 「飛ぶ鳥」の見立てについて

²⁵ 本文の万葉仮名は竹柏園複製西本願寺本万葉集による。

²⁶ 訓読みは佐竹昭広・木下正俊・小島憲之の『万葉集 本文編』（塙書房、1963年）に参照。

仁徳天皇の条に蛾が「一度為飛鳥」とあるから、蛾を飛ぶ虫とされているのは「蛾」の誤字説のもう一つの重要な証拠である。

しかし、どうして鳥自身を使わなくて鳥と似ている蛾を使うのか。もし、蛾が「一度為飛鳥」ということを証拠とし、鳥を『古事記』の編集者の考慮に入れれば、その「見立てる」鳥より、直接に鳥を使ったほうが更に妥当であろう。『日本書紀』にある鶺鴒のような体の小さい鳥がいるのに、直接に鳥を使わなくて、言い回しとして「蛾」を使う理由は難解である。

神野志隆光と山口佳紀の『古事記注解4』に、「しかし、仁徳天皇条の例は、蚕について、『一度為匍虫、一度為殻、一度為飛鳥、有変三色奇虫』と、一つのの虫が三態を取ることに不思議さを表現した箇所において、敢えて虫を『鳥』と言ったものである。それを一般化して、ここでも蛾を飛ぶ鳥と捉える発想から『鶺鴒』字を用いたという考えるのは、無理がある。むしろ、単純に『蛾』を『鶺鴒』に誤写したものと考えた方が素直である。」²⁷と指摘され、仁徳天皇条の例は理由になれないと主張する。また、山口佳紀と神野志隆光の新編日本古典文学全集『古事記』に『鶺鴒』は雁の家畜化したもの。『名義抄』にカリと読む。通説では『蛾』の誤写、あるいは『蛾』を鳥に見立てた意識的用字として、ヒムシと読むが、それだと下に『皮』とあるのと合わない」²⁸とあり、「鶺鴒」は雁の家畜化したものと記されている。

『古事記』の該当箇所と『日本書紀』の小彦名命の条を比べると、次のように一覧できる。

表1. 少名毘古那神（小彦名命）の乗り物と着物との対照表

	神の名	乗り物		着物	
		材料	実物	材料	実物
『古事記』	少名毘古那神	羅摩の実？	船	鶺鴒皮	衣服
『日本書紀』	小彦名命	白蕨皮	舟	鶺鴒羽	衣
類似点		植物	乗り物	鳥	着物

この表から見ると、その体が小さい神の乗り物について、材料は『古事記』にも『日本書紀』にも植物と記されているが、異なる植物である。また、神の着物について、『古事記』にも『日本書紀』にも動物の鳥と記されてあるが、異なる鳥である。この対照的なあり方は注意すべきである。その神の乗り物と着物に関して、『日本書紀』と『古事記』の編集者は同じ種類のものだと設定する上で、その物自身が違うように設定した。前述のように、神の乗り物の材料について、記紀とも同じ種類の植物を使い、その植物の一部分は船と似ている性格を持っている。また、記紀は何と言っても別の書なので、編集

²⁷ 前掲書『古事記注解4』P180.

²⁸ 山口佳紀・神野志隆光. 新編日本古典文学全集『古事記』. 小学館. 1997年. P94.

者が独自性を考えるうえで、故意にまったく同一の植物を使うのではなく、同じ性格を持っている同種類の植物を使ったと推測される。こういう意味からいえば、神の着物の材料についても乗り物の材料と同じく、同じ性格を持っている同種類のものであるが、まったく同一のものとは言い切れないであろう。それ故に、「鵝」と「鶇鶇」は両者とも同じ性格を持っている動物の鳥であるが、まったく同一のものではない。一方、「蛾」と「鶇鶇」は同じ性格を持っている動物ではなく、「蛾」は昆虫であり、「鶇鶇」は鳥である。「蛾」はどれほど鳥に似ている性質を持っていても、種類は相違する。

要するに、『日本書紀』と対照的に比べれば、むしろ『古事記』上巻の「鵝」は「蛾」よりも適切である。

4 古事記上巻の「鵝」の実態に関する考察

ここの「鵝」の実態について、従来の研究では、最も卓見を持っている神野志隆光と山口佳紀は、「蛾」の誤字説にいろいろ反論を出したが、結局「諸本の示すままに『鵝』字で解釈する線を追ってきたが、『鵝』字では、幾つかの難点をクリアーしたとしても、なお大きな問題が残ると言わなくてはならないのである」²⁹と主張し、「残る方向は、やはり何らかの文字の誤写と見る考え方であろう。」³⁰という結論を出した。しかし、神道大系『古事記』で指摘されたように、ここの「鵝」は「原型は『鵝』であることは言うまでもない」³¹。『古事記』上巻の「鵝」の正体に関する考察は更に検討する必要がある。

「蛾」の誤字説が妥当ではなかったら、『古事記』上巻の「鵝」は果たしてどのような字なのか。これを検討するには、まず『日本書紀』の小彦名命の条も参照すべきである。

『日本書紀』神代上に「是時、海上忽有人聲。乃驚而求之、都無所見、頃時、有一箇小男、以白薮皮爲舟、以鶇鶇羽爲衣、隨潮水以浮到。」とあり、この記述に対して、誰も疑問を持たなかった。疑問がない理由は恐らく不合理なところがないからである。「白薮皮」で作った舟も「小男」にふさわしく、「鶇鶇羽」の衣も「小男」に相応であるし、その一連の配置はまったく違和感がなく、合理的に見えるので、疑問がないわけである。

『古事記』の「鵝」を考察しようとしたら、『日本書紀』の小彦名命の条における「鶇鶇」を詳細に検討すべきである。

『莊子』逍遙遊に「鶇鶇巢於深林、不過一枝；偃鼠飲河、不過滿腹」³²とあり、鶇鶇が深い林の中に入って巢を作っても、一枝に過ぎず、偃鼠が河で水を飲んでも、満腹に過ぎないと述べており、深い森の中に入っても、体が小さいから、巢を作ってもただ一

²⁹ 同上。

³⁰ 同上。

³¹ 小野田光雄、神道大系『古典編一 古事記』。精興社、1977年、P187。

³² 郭慶藩、『莊子集釈』。中華書局、1961年、P24。

つの枝に過ぎないことで鷦鷯の体の小ささを強調する。それによって「巢林一枝」という熟語ができ、後世に大きな影響を与えた。『莊子』から鷦鷯が小さい鳥の代表と定着し、頻繁に中国の古代文献に登場してきた。

『三国志』巻五十三吳書八の裴松之の注に「大者有禿鷲、小者有鷦鷯」³³とあり、大きい鳥の中に禿鷲があり、小さい鳥の中に鷦鷯がいると言っており、小さい鳥の典型的な例を鷦鷯とした。

南朝の詩人範雲の『古意贈王中書』に「豈如鷦鷯者、一粒有餘貲」³⁴とあり、鷦鷯は一粒の米でも財産の余裕があると鷦鷯の体の小さいことを形容する。

『晋書』巻七十二・列伝第四十二に「鷦鷯不可与論雲翼、井蛙難与量海鰲」³⁵とあり、鷦鷯に大鵬の翼と論じることができず、井戸の中にいる蛙と海鰲を量ることもできないと、鷦鷯の小ささを風刺する。

李白の『空城雀』という詩に「本与鷦鷯群、不随鳳凰族」³⁶とあり、もともとは鷦鷯と群になり、鳳凰と一族になりたくない、小さい鷦鷯を古来中国で最も崇拝されている鳥としての鳳凰と対照し、鷦鷯の小ささを更に強調する。

以上の漢籍の用例から見ると、鷦鷯は古くから典型的な小さい鳥の代表として中国の古典文献に頻繁に登場し、体の小さい鳥のイメージとして定着している。また、その漢籍の典拠としての『三国志』・『文選』・『晋書』は古くから日本に伝わり、『日本書紀』に影響があると推測できる。

小さい鳥の代表としての鷦鷯の羽で小男の小彦名命の服を作るのは確かに何よりも相応である。その意味からいうと、『日本書紀』の「鷦鷯羽」は絶対に偶然の用語ではないと言えるであろう。それは文脈の合理性を熟慮して使った言葉であろう。

それでは、『古事記』の「鵲」はどうなるだろうか。

『古事記』の「鵲」について、前節で挙げた古事記の写本の図2の道祥本と図3の春瑜本の左側の行間に小さい文字で「鷦鷯羽、日本紀」と書いてあり、『日本書紀』にこれが「鵲皮」ではなく、「鷦鷯羽」となっていることが指摘されている。つまり、少なくとも道祥本と春瑜本の執筆者はこの「鵲」に注目し、『日本書紀』の同じ場所の用字を参照した。そうすれば、少なくとも、道祥本と春瑜本の祖本は間違いなく「鵲」であり、「蛾」などの誤写ではないと判断できる。なぜなら、『日本書紀』の用字までも考慮したら、「蛾」の誤写に気付かないことはありえないであろう。『古事記』上巻の「鵲」は道祥本と春瑜本の二つの写本自身のみならず、その祖本でも間違いなく「鵲」であることが明らかである。

³³ 陳寿（撰）・裴松之（注）、『三国志』、中華書局、1959年、P1247。

³⁴ 蕭統（編）・李善（注）、文選、上海古籍出版社、1986年、P1220。

³⁵ 中華書局編輯部編、晋書、中華書局、2000年、P1265。

³⁶ 中華書局編輯部点校、全唐詩、中華書局、1999年、P1707。

また、表1に示したように、羅摩の実と白藪皮（植物の一部）、鵝皮と鷗鷗羽（動物としての鳥類の体の一部）を対照的に考えれば、西郷信綱の指摘されたように、「しかし書紀に『鷗鷗の羽を以て衣にして』とあるから『鵝』もこれに類する鳥ではないかという気もする」³⁷。具体的に言えば、『古事記』にも鳥類の鵝のほうが更に妥当である。「鵝」の実態を「蛾」と思うより、むしろ「鵝」自体のほうが最も妥当である。

ここの「鵝」は「鷗鷗」と思われ、鷗鷗に改めた説もあるが、それは意味上において一番ふさわしいのかもしれない。だが、羅摩の実と白藪皮との区別から見ると、『日本書紀』の編集者はもしかしたら、わざわざそういう区別を作りたいと考え、故意に相違点を作ったのではないかと考える。無論、故意に相違点を作るという説は筆者の個人的な推測である。しかし、編集動機が違う『日本書紀』と『古事記』の編集者は、故意に相違点を作る可能性が高い。『日本書紀』は「漢文体で書かれているのも、対中国を意識してのもの、中国でも読めるものを意図していたと考えられます。つまり、国外をも意識してのものであったと思われる」³⁸。上述の漢籍で示したように、鷗鷗は漢籍で典型的な小さい鳥の代表であり、『日本書紀』の編集者は恐らく漢籍を考慮して「鷗鷗」を選んだのであろう。外国（主に中国）を意識して編集された『日本書紀』は中国文化を考えて編集されたことに違和感がない。一方、古事記は「国内向けに書かれたもの」³⁹なので、漢籍などを考慮しなくてもよい。また、諸本はここに一文字の「鵝」であり、二文字の「鷗鷗」を一文字の「鵝」に間違えた可能性も低い。勿論、『新版 古事記』には「真福寺本は『鵝』のように見えるが、『鷗』の崩しと判定する」⁴⁰とあり、「鵝」は一文字の「鷗」の崩しであるという説もある。しかし、「焦」を崩して「我」になることは考えにくい。『くずし字用例辞典』（児玉幸多、東京堂出版社、1993）を調べてみると、そういう用例が見られない。『日本書紀』にも「鵝」という字があるので、日本の上代に「鵝」の字がすでに用いられることが明白である。字を崩して明確に別の字に崩したら誤解されやすく、誤写になる恐れがあらう。また、真福寺本の「鵝」は「鷗」の崩しだとしたら、前述の図1から図6のほかの写本も同じ崩しであるのか。その中の猪熊本は「我」のみであり、それは「鷗」の崩しであると更に考えにくい。

要するに、上述のごとく、現在の様々な証拠から見れば、「蛾」の誤字説は妥当ではなく、棄て去るべきであり、ほかの誤字説もまだ証拠がないと考える。

5 おわりに

³⁷ 西郷信綱、『古事記注釈』、平凡社、1976年、P124 - 125。

³⁸ 谷口雅博、古事記の謎をひもとく、弘文堂、2018年、P5。

³⁹ 同上 P6。

⁴⁰ 中村啓信、新版 古事記、角川書店、2009年、P63。

「蛾」の誤字説は延佳本によって提出されて以来、支持者が少なからずあり、特に本居宣長の『古事記伝』の解説により、更に支持者が多くなった。勿論、西宮一民・神野志隆光・山口佳紀・小野田光雄のような穏当な説を取る研究者がいらないわけでもないが、近年、「鵺」を「蛾」に改めた現代日本語訳もある。菅野雅雄（2012）・武光誠（2012）・池澤夏樹（2014）などの現代語訳はその代表的なものである。また、その影響は日本の現代語訳本のみならず、中国の『古事記』中国語訳にも影響を与えた。中国において一番流布している周作人の訳した『古事記』も「鵺」を「蛾」に改めている。周作人の訳本は2018年に中国の五つの出版社で六回出版されたことを見れば、その影響はわかるであろう。しかし、「蛾」の誤字説と「鵺」の実態を検討した結果、以下の結論が得られた。

第一に、「蛾」の誤字説における理由として、鵺皮過大論、『日本書紀』と『万葉集』の間接証拠、「飛ぶ鳥」の見立て、いずれも不十分で妥当ではない。『古事記』上巻の諸写本における「鵺」の用字を総合して考えれば、「蛾」の誤字説は棄て去るべきである。

第二に、古事記上巻の「鵺」はどう考えるべきであるか。現在、最も妥当な説はやはり、「鵺」であり、その用字こそ一番信頼すべきだと思う。

第三に、勿論、日本書紀の「鵺鵺」を参照して考えれば、意味上において「鵺鵺」が一番ふさわしく、可能性がないわけでもない。しかし、まず、道祥本と春瑜本の行間にある「鵺鵺羽、日本紀」はこの「鵺」は「鵺鵺」の誤写ではないと間接的に証明できる。次に、羅摩の実と白藪皮との区別から見れば、古事記と日本書紀はここに同じ「鵺鵺」を用いる可能性が低い。最後に、二文字を一字に間違えた可能性もそれほど高くない。したがって、「鵺鵺」の誤字説と「鵺」の崩しの説も未だに証拠がなく、危険な仮説である。

要するに、古事記上巻の「鵺」は誤字の可能性がまったくないとは限らないが、現在の段階において、最も妥当な説はやはり、「鵺」であり、「蛾」の誤字説は未だに決定的な証拠がなく、現在は採用できないと筆者は考えるのである。

参考文献

- 青木和夫、石母田正、小林芳規、佐伯有清（1982）日本思想大系『古事記』岩波書店
荻原浅男、鴻巣隼雄（1973）日本古典文学全集『古事記 古代歌謡』小学館
尾崎暢殃（1966）『古事記全講』加藤中道館
小野田光雄（1977）神道大系古典編一『古事記』精興社
河村秀根・益根（編著）・小島憲之（補注）（1969）『書紀集解』臨川書店
神野志隆光・山口佳紀（1997）『古事記注解4』笠間書院
西郷信綱（1967）『古事記の世界』岩波書店
西郷信綱（1976）『古事記注釈』平凡社
坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋（1967）日本古典文学大系『日本書紀 上』岩波書店

佐竹昭広・木下正俊・小島憲之（1963）『万葉集 本文編』塙書房
谷口雅博（2018）『古事記の謎をひもとく』弘文堂
次田潤（1926）『古事記新講』明治書院
中島悦次（1930）『古事記評釈』山海堂出版部
西宮一民（1979）『古事記』新潮社
西宮一民（2000）『古事記 修訂版』おうふう
三浦佑之（2006）『口語訳 古事記 神代編』文芸春秋
本居宣長（1968）『本居宣長全集 第十卷』筑摩書房
山口佳紀・神野志隆光（1997）新編日本古典文学全集『古事記』小学館
度会延佳（1687）『龍頭古事記』勢陽講古堂・洛陽重徳堂蔵版
陳寿（撰）・裴松之（注）（1959）『三国志』中華書局
郭慶藩（1961）『莊子集釈』中華書局
阮元（校刻）（1980）『十三經注疏 儀礼注疏』中華書局
蕭統（編）・李善（注）（1986）『文選』上海古籍出版社
中華書局編輯部点校（1999）『全唐詩』中華書局
中華書局編輯部編（2000）『晋書』中華書局
周作人（1963）『古事記』人民文学出版社

（せん さいせい 大学院人文社会系研究科 外国人研究員・華中師範大学 准教授）